平成２８年度第１回市民評価委員会専門部会

（教育文化・自立協働・計画の推進）

日　時：平成２８年９月２１日（水）８：５０から１０：２０まで

会　場：市庁舎３階　３２会議室

事業名：１　芸術文化振興事業
　　２　放課後子ども教室推進事業
　　３　生涯学習大学等の開催
　　４　学力向上学習支援事業
　　５　不登校対策総合推進事業

参加者：●市民評価委員
　　加藤部会長、加藤委員、戸田委員
　　●担当課
　　スポーツ文化課、社会教育課、学校教育課
　　●事務局
　　小島副課長

芸術文化振興事業（スポーツ文化課）

８：５０から９：１０まで
スポーツ文化課：曽我部課長、森田主事

１　概要説明

担当課より概要説明

２　質疑応答

Ｑ：対象は子どもから大人まで、市民全員としているのか。
Ａ：そうだが、現在は、小中学校に直接出かけて行って、そこで芸術文化に触れてもらうことに力を入れている。

Ｑ：音楽出前コンサートは、何校ぐらいを対象に実施しているのか。
Ａ：昨年度は、若宮小と金子小の２校を対象に実施した。芸術文化キャラバン隊については、小学校６校、中学校６校で実施した。いずれもこちらで対象校を選んでいるのではなく、各学校に呼びかけて、手を上げた学校を対象としている。学校現場でも様々な行事があり、必ずしも希望に沿う形にならない場合もある。

Ｑ：市内の学校均しくということが望ましいが、学校の熱心さによって偏ってしまうことが考えられる。偏りなく実施できているか。
Ａ：学校行事との兼ね合いや学校の考え方によるところもあるが、予算的に全校を回ることはできない。もう少し予算があれば違うやり方も考えられるのだが。

Ｑ：コンサート後にアンケート等は取っているのか。
Ａ：アンケートではないが、感想文を書いてもらっている。

Ｑ：どんな反響か。
Ａ：本物の演奏に触れられて感動したと言った意見が多かったことと、平成２７年度に実施した篠笛コンサートでは、初めて篠笛を見たという意見が多かった。反響はとても良い。

Ｑ：地域の演奏家の掘り起しにもなればよい。

３　評価結果

重点化する。

子ども達が本物の芸術文化に触れられる事業であり、全児童生徒が均しく体験できるよう、重点化して取り組んでいただきたい。

放課後子ども教室推進事業（社会教育課）

９：１０から９：２５まで
社会教育課：三沢次長、中西副課長、瀬崎係長

１　概要説明

担当課より概要説明

２　質疑応答

Ｑ：９教室ということだが、新居浜市の公民館の数は。
Ａ：１８館ある。

Ｑ：半分が対象ということか。
Ａ：公民館単位では８教室、１教室は教育会館で全市対象に行っている土曜寺子屋になる。

Ｑ：いつ頃から始まった事業なのか。
Ａ：平成１９年から始まっており、今年で１０年目になる。

Ｑ：１８館中、８館しか実施できない問題点は何か。
Ａ：この事業の目的は、地域全体で子供を育てていくことであり、地域の方の自主的な参加が必要不可欠だが、忙しい中、定期的に参加しなければならない負担もあって全市的に広まっていかない状況にある。今後も地域の受け皿づくりを進め、全校区で実施できるよう取り組んでいきたい。

Ｑ：９教室に至る経過は。
Ａ：平成１９年に７教室で開始し、２３年度に８教室、２４年度に９教室、２５・２６年度が１０教室、２７年度から９教室となっている。２５・２６年度は障害児を対象にした教室を開いたが、障害児の放課後デイサービス事業が充実してきたこともあり閉鎖した経緯がある。これまで少しずつだが増えてきており、今後も全市に広がっていくよう取り組んでいきたい。

Ｑ：地域の人の協力がなければ。
Ａ：行政から強制的にできるものではない。ただ、神郷小や惣開小では、夏休みの短期教室等を開催しているが、コンスタントに開催できないということで、この事業には含まれていない。

Ｑ：子供の健全な育成のためにも、地域の方々と取り組むこのような事業は続けていただきたい。
Ｑ：全小学生の何パーセントぐらいが参加しているのか。
Ａ：延べ人数しかカウントしていないが、１教室当たり３～４０人の参加がある。

３　評価結果

現状のまま継続する。

今後、全市に広がっていくよう取り組んでいただきたいが、地域の協力体制が必要不可欠であり、受け皿作りも進めながら、現状のまま継続して取り組んでいただきたい。

生涯学習大学等の開催（社会教育課）

９：２５から９：４５まで
社会教育課：三沢次長、中西副課長、瀬崎係長
生涯学習センター：本田所長、大角

１　概要説明

担当課より概要説明

２　質疑応答

Ｑ：２４講座あるが満員なのか。
Ａ：どれも人気があるが、別子銅山や自然探訪等は多すぎて抽選をしている。

Ｑ：遍路事始めは、テレビでも見ている。
Ａ：長くやっている講座だが、とても人気が高い。

Ｑ：受講料は１回当たりの金額か。
Ａ：５回講座なら５回分の金額になる。

Ｑ：ボランティアや市民スタッフもいるようだが、来年度どんな講座を実施するかは、その方たちと会をして決めているのか。
Ａ：毎年この時期に会議を開催して決定しているが、推進員１８名、スタッフ１０名で、アンケート結果や企画提案を基に考えているところである。

Ｑ：講座に参加される高齢者の年齢は。
Ａ：夏休みの高校生対象の講座を除けば、平均年齢は７０代前半ぐらいだと思う。

Ｑ：なつかしの心の唄講座もテレビで見た。
Ａ：それも人気がある。

Ｑ：内容も充実していて魅力ある講座がたくさんある。講座は日中に限られているのか。
Ａ：対象が仕事をリタイアしている高齢者のため、日中のみとしている。

Ｑ：予算が増えればもっと講座を増やすことができるのか。
Ａ：受講料で講師謝礼が負担できるような計画としている。

Ｑ：新居浜市は健康寿命が低いと聞くが、元気な高齢者を増やすためにも、このような講座を受講することは有効。予算が増えたらどうしたいのか。
Ａ：調理を伴う講座や広い部屋が必要な講座は、ウィメンズ等他の施設を利用しているが、理想を言えば、同じ施設で移動なく実施できればありがたい。

Ｑ：施設や設備の改修までは難しいと思うが、講座をテレビで放送する際に講師の声が聞き取りにくい場合がある。その辺りを改善していただきたい。
Ａ：講師の方が高齢ということもあって・・・・

３　評価結果

重点化する。

元気な高齢者を増やし、健康寿命の延伸にもつながることから、講座の充実や受講者の増加となるよう、重点化して取り組んでいただきたい。

学力向上学習支援事業（学校教育課）

９：５０から１０：１０まで
学校教育課：高橋課長、田中指導主幹、長井主幹

１　概要説明

担当課より概要説明

２　質疑応答

Ｑ：直接経費の内、放課後まなび塾が大部分を占めていたということか。
Ａ：そうである。

Ｑ：算数・数学コンテストは希望者のみか。
Ａ：そうである。今年度も実施したが、昨年に比べて大幅に増えた。

Ｑ：全員に周知はしているのか。強制するようなものではないのか。
Ａ：全員に周知はしているが、問題が高度なため、算数・数学に自信を持っている子が受けに来るし、英語が得意な子は英語キャンプに参加している。

Ｑ：成績は良くなっているのか。
Ａ：受験者の興味や関心が高まるよう問題は先生達が作成しているが、高度な問題にチャレンジさせようとした結果、今年度は金賞（満点）がいなくなってしまった。難易度の設定が難しい。

Ｑ：初級、中級、上級とチャレンジしていくようにすれば、受講者も増えるのでは。
Ａ：金賞にはトロフィーを渡しており、それを励みにしてもらっている。

Ｑ：放課後まなび塾はあと何校区開設できていないのか。
Ａ：残り１０校区になる。もっと増やしていきたいが、学習支援員の確保が難しく、工夫しながら進めていかなければならない。

Ｑ：支援員は教員ＯＢが対象になるのか。
Ａ：どの校区にも核となってもらえる支援員が一人は必要であるため、そういった方に声をかけているが、中々見つからず苦慮している。

Ｑ：英語キャンプは企画運営が大変だったのでは。
Ａ：日本学生協会基金では全国でこのような英語キャンプを実施しており、全面的な協力があったため、大規模な形で実施することができた。

３　評価結果

重点化する。

放課後まなび塾については、全校区で実施できるよう、また、様々な取組

を通じて学力向上が図られるよう、重点化して取り組んでいただきたい。

不登校対策総合推進事業（学校教育課）

１０：１０から１０：２０まで
学校教育課：高橋課長、田中指導主幹、長井主幹

１　概要説明

担当課より概要説明

２　質疑応答

Ｑ：不登校数が１４４名か。
Ａ：年々増加傾向にある。

Ｑ：児童生徒数は減少しても不登校数は増えているということか。
Ａ：そうである。不登校の比率が高くなっている。

Ｑ：対策として、家庭訪問や様々な活動をしているが、成果として登校につながったケースは。
Ａ：昨年度は７０回の訪問を実施しているが、小学校児童１名が今年度から、中学校生徒についても昨年度中に学校復帰を果たしている。

Ｑ：事業費について、国や県の補助はないのか。
Ａ：この事業については、全て一般財源となっているが、フリースクール等で学ぶ不登校児童生徒支援モデル事業については、約７００万円、１００％国の委託事業で実施することとしている。

Ｑ：社会福祉士を採用するのか。
Ａ：このモデル事業の中で、福祉の側面からのアプローチということで、社会福祉士の資格を持ったスクールソーシャルワーカーに家庭訪問や学習支援を行ってもらうことで、事業展開を考えている。

Ｑ：対象の社会福祉士はいるのか。
Ａ：２人を考えているが、家庭が原因で不登校になっているケースをお願いしようと思っている。

３　評価結果

現状のまま継続する。

とても難しい問題だが、児童生徒数の減少に対し増加傾向にあるため、ひとりでも多くの児童生徒が学校復帰できるよう、現状のまま継続して取り組んでいただきたい。